

がん化学療法科 ニュースレター

## ほほえみ 第141号



今年は3年ぶりに「さんさ踊り」が開催されるようです。とはいえ、新型コロナの流行がこれまでのピークとも言われている状況なので、素直に見に行ける環境にはなく大人しくしています。合理的という言葉は正しさよりは、論理的な一貫性を示す言葉であると言われてはいますが、新型コロナの対応に関しては、合理的な説明がつかなくなってきており、方針の見直しが必須のように思われます。

## 人新世の「資本論」

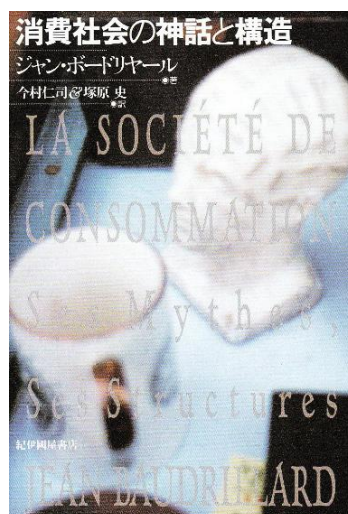
昨年の新書のベストセラーの一冊ということでした。人新世は「ひとしんせい」と読みます。少し前に、トマ・ピケティが、『21世紀の資本』という本を書いて、世界的なベストセラーになりましたが、こちらは「資本論」とあるだけにマルクスに沿った本です。たまたま、堆肥作りを通してSDGsを考えていたので、この本が買ってあったのを思い出して読んでみました。

マルクスといえば、唯物史観や階級闘争といった言葉が思い浮かびますが、この本では古典的なマルクス思想ではない、資本主義が隆盛したその先、マルクスが亡くなった後の資本主義をマルクスがどう予見し、資本論として考察していたのかを問うています。すなわち、全世界的に資本主義が敷衍し、その頂点を過ぎることによって経済成長のフロンティアを失っていくという、現代資本主義社会の問題点を考察するものです。著者の斎藤幸平氏は、最近、よくテレビのコメンテーターなどでお見掛けしますね。

読んだ感想としては、生産手段のことが主に言及されているようです。このままの大量生産・大量消費社会では地球環境への負荷が大きすぎて、温暖化のように喫緊の問題を解決できるどころか破局に導くことが必定であり、資本主義の文脈で解決できないことを示します。マルクスの資本論のその後を読み解きながら、生産手段を「コモン」にすることで解決策を提案するものです。経済成長と温暖化対策は相反するなど、正統派の議論を行っており、このことが、この著作が広く受け入れられた理由なのではないかと思えます。

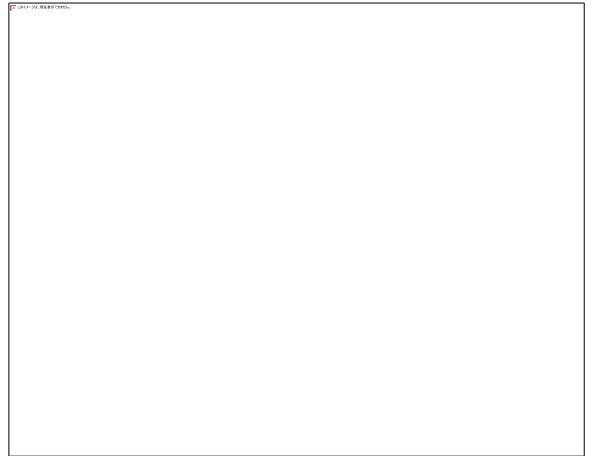
個人的には、大量生産の環境負荷ということはもちろん重要なのですが、資本主義社会の両輪のうちのもう一方、つまり大量消費に関する考察が対になることで、完成するように思います。今まで読んだ本の中では、古典的な本なのかもしれませんが、ジャン・ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』があります。この本は1970年代に書かれたものですが、消費が必要に応じたものではなくシンボルとなり、生存に必須ではない、ガジェット(がらくた)の消費に陥っていくことを鋭く予見したものです。

生産手段を「コモン」とし、低成長社会を受け入れる一方で、消費のあり方を問い直すことが、SDGsの本質になるのではないかということ、堆肥を作っているだけでは、SDGsにはならないのかもしれないと思いました。



## ブルーブラック

最近は、筆記用具は、ほぼ万年筆のみなのですが、万年筆には、インクがつきものです。学生時代はブラックを使っていましたが、今はブルーブラックにしています。ブルーブラックは、インクごとに多少の違いがありますが、一つのインク壺を使いきるには2-3年かかるので、沢山使い分けてみた訳ではありません。今使っているエーデルシュタイン・タンザナイトは、澄んだ感じの透明感のある発色で、インクのフローも良いですが、紙背に透るくらいなので、注意が必要です。書道なら、紙背に透るくらいが良いのですが、万年筆では、丁度良いということにはならないですね。



## 我が家のSDGs その後

6月中旬にバラの花びらで堆肥を作り始めましたが、その後、何回か上下をかき混ぜました。実際には、ほぼ放置でしたが、昨日、出来映え確認したところ堆肥らしくなっていました。匂いも、かすかに腐葉土のような匂いがする程度であり、多分上手くいっているのではないかと思います。剪定したバラの枝などは形が残っていますが、花びらのように柔らかいものは、既に土になったようです。

水も追加で加えることもなく、自然の雨が染み込む程度で管理していましたが、適度に湿った状態でした。もう少し、発酵が進むのを待って使ってみたいと思います。この感じだと、今年中にもう1サイクル、堆肥づくりをしても良いかと思っています。今度は、雑草や、剪定したバラの葉が中心になると思います。後で、原料によって出来栄えに違いが出るか比較してみたいと考えています。



## MEMO 8月のがん化学療法科の予定

8月15, 16日 休診にします

### 診療応援の先生方

月曜日 齋藤里佳先生  
第1, 3, 5火曜日 佐々木啓寿先生  
第2, 4火曜日 工藤千枝子先生  
第1, 3, 5木曜日 笠原佑記先生  
第2, 4木曜日 今井源先生

